

平成 30 年度

沖縄県の戦争遺跡



前田高地
遠景



前田・経塚陣地壕群



留魂壕
遠景

【沖縄県立埋蔵文化財センター】 ■ エントランスホール

6月5日(火) ▶ 6月24日(日)

【浦添市会場】 ■ 浦添グスク・ようどれ館

■ 浦添大公園南エントランス 管理事務所多目的室

6月5日(火) ▶ 9月2日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター・浦添市教育委員会

合同開催

前田高地から首里まで

目 次

ごあいさつ	1
1 沖縄戦の経過概要	2
2 前田高地	4
3 前田・経塚陣地壕群	10
4 首里の戦争遺跡と戦争関連遺構・遺物	16
5 おわりに	24
那覇・浦添の戦争遺跡分布図	25

【凡 例】

1 本誌は、沖縄県立埋蔵文化財センター・浦添市教育委員会合同企画展「沖縄県の戦争遺跡 ～前田高地から首里まで～」を補完するものとして、鈴木真理・兼島小百合の協力の下で、久高健・大堀皓平が編集しました。

なお、開催施設及び期間は下記のとおりです。

■ 沖縄県立埋蔵文化財センター：平成30年6月5日（火）～6月25日（日）

■ 浦添グスク・ようどれ館、浦添大公園南エントランス管理事務所多目的室
：平成30年6月5日（火）～9月2日（日）

2 本誌の原稿分担は下記のとおりです。

1・4・5：大堀皓平（沖縄県立埋蔵文化財センター）

2・3：佐伯信之・仁王浩司・安斎英介・又吉幸嗣・新垣理恵子（浦添市教育委員会文化財課）

3 本誌に掲載されている写真は、発掘調査報告書等で掲載した写真のほか、本企画展のために新たに撮影した写真を用いました。なお、写真撮影は、領家範夫・伊禮若菜・知花香織の協力の下で、大堀皓平・菅原広史（浦添市教育委員会文化財課）が行いました。

4 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用される場合は出典を明記してください。

5 既刊の発掘調査報告書に記載されている遺構・遺物名の一部について、本図録で異なる名称で掲載されています。これは、報告書の刊行後、新たな研究の進展によって詳細等が判明したことによるものです。

ごあいさつ

現代を生きる私たちには戦争の悲惨さ、平和のありがたさを後世に伝える責務があります。戦争体験者が年々少なくなる中で、戦争遺跡は当時の記憶を残す“物言わぬ語り部”として重要な存在となっています。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成22～26年度までの5カ年にわたって戦争遺跡詳細確認調査を実施し、平成28年度から6月23日の慰霊の日に合わせて「沖縄県の戦争遺跡」展を開催しております。今年度は、沖縄戦の激戦地となった前田高地から首里に焦点をあて、浦添市教育委員会と連携し、当センター及び浦添グスク・ようどれ館、浦添大公園南エントランス管理事務所多目的室の三会場で開催します。

多くの県民の皆様にご覧いただき、戦争遺跡の重要性が広く認識され保存・活用が図られるとともに、平和について考える機会となれば幸いです。

平成30年6月5日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 登川 安政

ごあいさつ

浦添市のほぼ中央に位置する浦添城跡は、沖縄戦時には「前田高地」と呼ばれ、日米両軍による激しい戦闘が行われた場所でした。近年は、沖縄戦を描いた映画「ハクソー・リッジ」の舞台として注目され、世界中から見学者が訪れています。

浦添市教育委員会では、例年平和について考えることの多いこの時期に「浦添城跡出土の戦争遺物展」を開催しています。今年度は、県立埋蔵文化財センターと共同し、前田高地を含め、前田・経塚地区や首里の戦争遺跡を通して、浦添地域の周辺と戦争をテーマに展示会を開催いたします。また、会期中は展示会場とあわせて前田高地の現地を実際に見学頂ける関連行事も予定しています。

本展示会が、前田高地に多くの方々に足をお運び頂き、ともに平和について考えるきっかけの一つとなれば幸いです。

平成30年6月5日

浦添市教育委員会
教育長 嵩元盛兼

1 沖縄戦の経過概要

沖縄戦の開始まで

■「全島要塞化」 1944（昭和19）年7月7日にサイパン島が米軍に占領されたことをうけ、大本営は沖縄で上陸した米軍と決戦する「捷号作戦」を策定しました。沖縄には中国北部や旧満州の部隊が転用配備され、沖縄の各地で住民や小学生までを勤労奉仕として動員してトーチカや壕を構築、さらに公共施設や民家の接收や食糧供出など、「全島要塞化」が進みます。

■「10・10空襲」 1944（昭和19）年10月10日の「10・10空襲」によって、那覇市は軍民ともに多大な被害を被りました。さらに第9師団が台湾へ移動したこともあり、第32軍は持久作戦を策定しました。司令部を首里に置き、嘉数高地・前田高地などに強固な陣地を構築して、沖縄本島西海岸からの米軍の上陸に対して備えました。一方で、10・10空襲以後は、県庁や市町村役場、民間でも区や家族単位の防空壕の構築が急増しました。

■沖縄戦前夜 1945（昭和20）年1月20日に発令された「帝国陸海軍作成計画大綱」を受け、兵力補充のために民間人も「根こそぎ動員」して戦闘に備えますが、大本営の狙いは本土決戦準備の時間稼ぎでした。

沖縄戦の経過

■米軍上陸 米軍は1945（昭和20）年3月23日から空襲、翌24日には「鉄の暴風」と呼ばれるほどの艦砲射撃が開始され、3月26日に座間味島に上陸、同月31日には慶良間諸島の占領が宣言されました。さらに4月1日には本島中部西海岸に上陸、同月3日には東海岸に達し、本島を南北に分断しました。津堅島には4月10日に米軍が上陸し、地下要塞を巡って戦闘があり、同月11日に日本軍は壊滅しました。なお、米軍は4月4日に収容所を開設し、中部の住民の多くが収容されました。

■日米の攻防 進撃を進める米軍は4月9日に嘉数高地に達し、以後4月下旬まで嘉数高地と浦添市前田高地をはじめ、宜野湾・浦添・中城・西原で激しい戦闘が繰り返されました。さらに5月3日から5日までの間、日本軍は前田高地一帯などに総攻撃を行いました。この間、住民は壕や墓に避難していましたが、戦闘によって壕から出され、南部に避難したり、戦闘に巻き込まれたりしました。

■南部撤退 浦添・西原を突破した米軍はさらに第32軍の司令部のある首里に迫り、5月上旬には米軍がチョコレート・ドロップと呼んだ弁ヶ嶽や石嶺・大名・末吉方面で激戦が展開されました。また、西原町の運玉森（コニカル・ヒル）や、現那覇新都心方面の52高地（シュガーローフ・ヒル）などで激戦が展開されましたが、5月20日までに米軍が緒戦を制しました。なお、これらの戦闘では、ガマに避難していた住民も義勇隊として動員されました。こうして首里防衛が困難となったことから、第32軍は5月27日に首里から糸満の摩文仁に撤退し、29日に首里は米軍によつ

前田高地は国指定史跡「浦添城跡」一帯の丘陵を指し、最も高い場所では標高が約 148 mになります。のこぎりのように鋭く切り立ったその姿から、米軍から「ハクソー・リッジ」と名付けられました。また、南東側にワカリジー（^{ためともいわ}為朝岩）と呼ばれるやりのように切り立った岩があり、米軍は「ニードル・ロック」と名付けました。

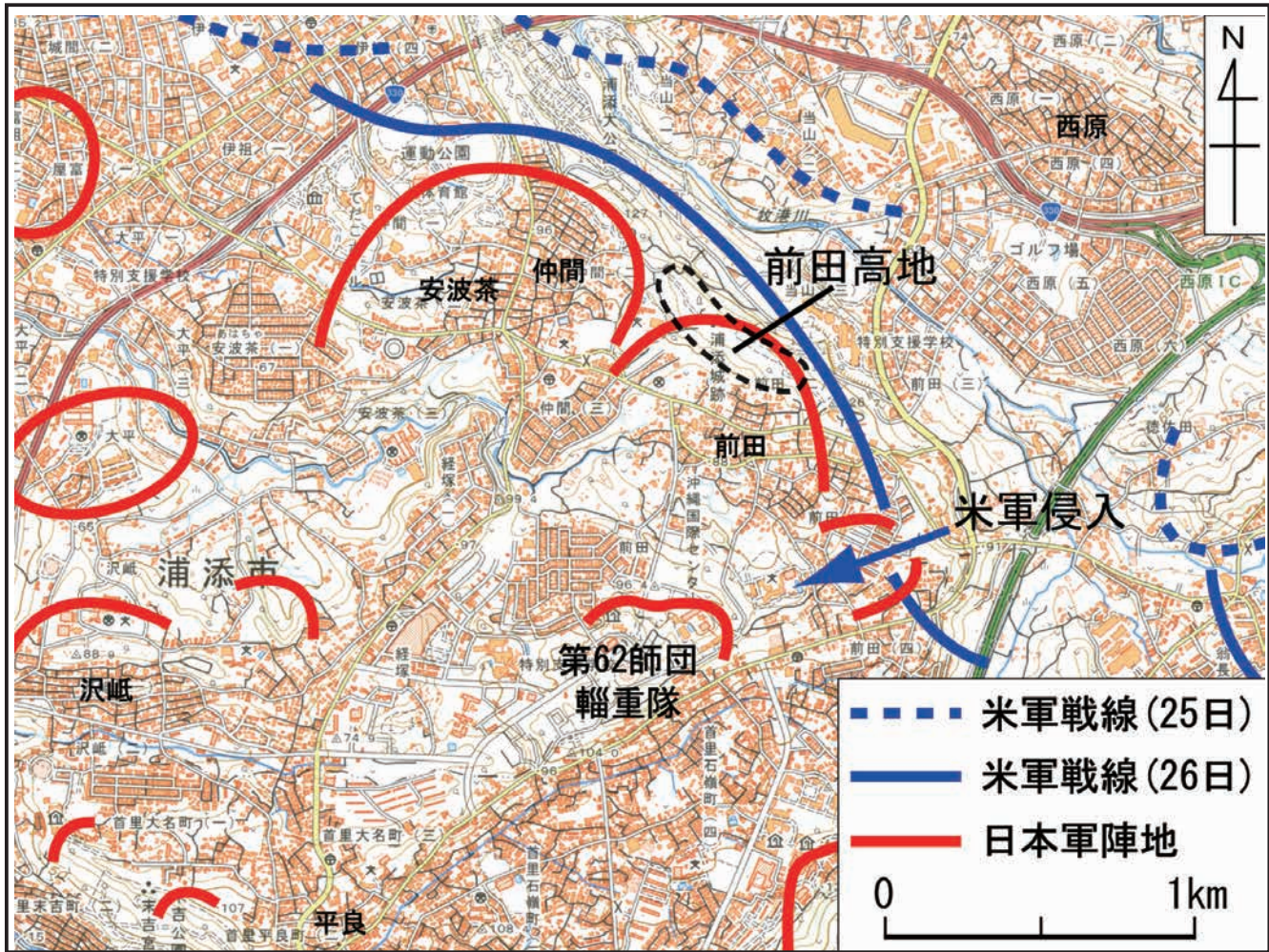
沖縄戦当時、前田高地は米軍にとって首里の軍司令部に接近するために突破しなければならない障壁でした。また、日本軍にとっては前田高地を奪われると首里の軍司令部に米軍が殺到するため、死守しなければならない防壁でした。そのため、前田高地をめぐる攻防は「ありったけの地獄を一つにまとめた」といわれるほど激しい戦闘になりました。

1945（昭和 20）年 4 月 1 日に沖縄本島に上陸した米軍は嘉数高地を陥落させ、25 日に前田高地への攻撃を開始します。米軍はまず高地頂上を奪おうと試みますが、頂上に立った所で日本軍の攻撃を受け、数分のうちに 18 名が犠牲となりました。それから高地頂上の争奪戦が繰り広げられ、米軍は多くの死傷者を出しました。

一方、日本軍は洞窟に陣地を置き、白兵戦や夜間攻撃などを行いますが、米軍の猛攻により多大な損害が出ました。頂上付近を占拠した米軍は、洞窟の入口を破壊することで日本軍を閉じ込め、追い詰めていきます。5 月 6 日に前田高地は米軍により完全に制圧され、日本軍は撤退することになります。



前田高地（南側から）



前田高地の戦闘 陣地図 (4月25～26日) ※戦線や陣地はおおよその位置



前田高地の戦争関係遺構

激戦が繰り広げられた前田高地では、現在でも戦争に関係する壕が残されています。戦闘や戦後の採石で失われた箇所もあり、前田高地の陣地の全容は明らかではありませんが、多くの手記に沖縄戦時の様子が記録されています。

浦添城跡の復元整備に伴う発掘調査によって新たに確認される遺構も多く、小銃やカンテラなど沖縄戦で使用された遺物も確認されています。なかには暗しん御門のように通路を壕として利用した痕跡も見つかりました。これらの発掘調査によって、前田高地における戦闘の実相が徐々に明らかになっています。

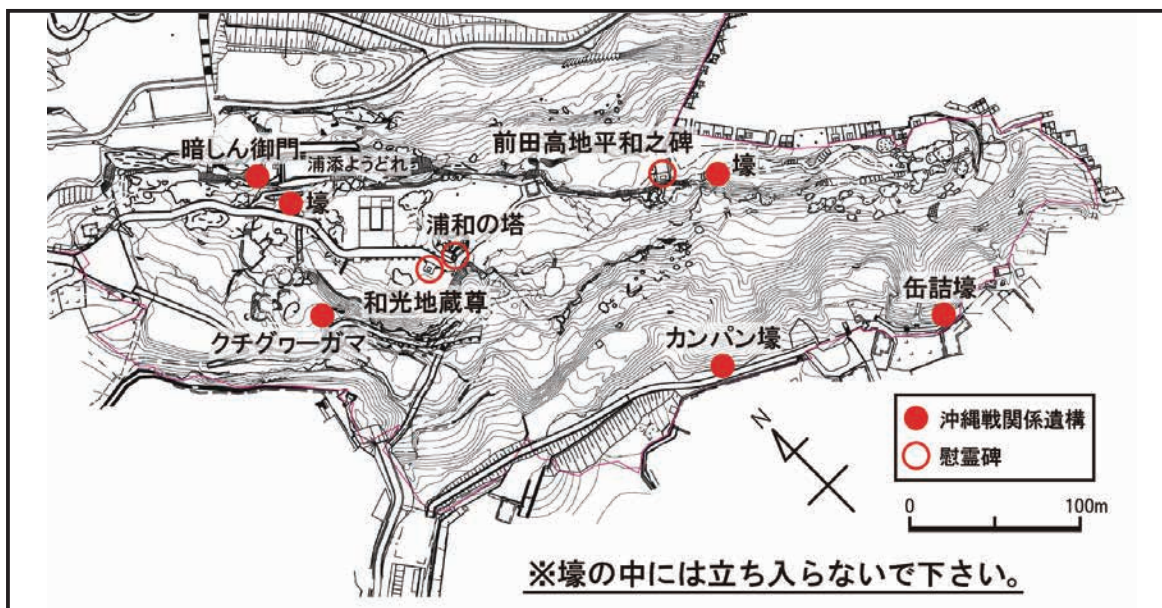
なお、前田高地内には沖縄戦と関連して、浦添市域の戦没者を慰霊した『浦和の塔』や前田高地の戦いの戦没者を慰霊した『前田高地平和之碑』、大阪の四天王寺門徒から寄贈された『和光地藏尊』などの慰霊碑が建立されています。



小銃と銃剣



カンテラ



前田高地の戦争関連遺構と慰霊碑

くら うじょう 暗しん御門

暗しん御門は自然の岩盤を利用して造られた長さ約10mのトンネルで、浦添ようどれの前庭から二番庭に通じていました。琉球国時代の絵図や戦前の古写真にもその様子が確認でき、「トゥールウジョウ（通る御門）」とも呼ばれていましたが、沖縄戦により大きく損壊しました。

浦添市教育委員会は平成8年度から12年度にかけて浦添ようどれの発掘調査を行い、そのなかで暗しん御門が残存している状況を確認しました。暗しん御門の入口と出口には通路をふさぐ形で石垣が積まれた状況が確認され、日本軍が陣地として使用していたことがわかりました。暗しん御門の床面は炭や灰層に覆われ、武器類や着用品などの軍用品、炭化した食糧、碗や皿などの日用品が出土しました。

すすけた石垣や破裂した薬きょう、溶けたガラス製品などは戦闘中に激しい攻撃を受けたことを物語っています。



発掘調査時の暗しん御門



出土した戦争遺物



炭化した食糧



溶けたガラス製品

かんづめごう
缶詰壕

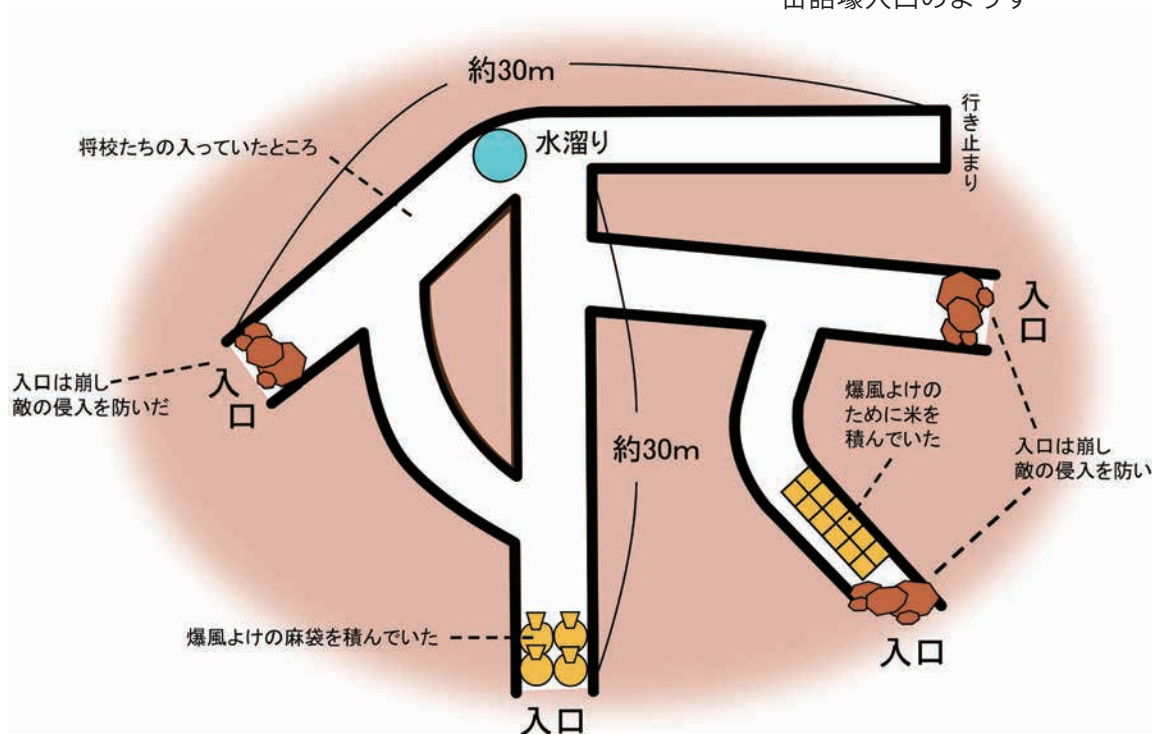
沖縄戦当時、浦添城跡南側斜面には日本軍による多数の陣地壕が構築されていたと考えられていますが、現在は数か所が確認できるだけです。

缶詰壕は、浦添城跡南側斜面に残存している壕の一つで、内部は複雑な形状をしています。日本軍用の食糧を保管した壕で、「糧食壕」とも呼ばれています。魚肉団子や鯖、パンなどの缶詰のほか、乾燥野菜や米、酒（泡盛）、味噌などの入った箱や袋が豊富にあり、これらを出入口に積み上げることで、弾よけ・爆風よけにしていました。

缶詰壕では大隊長や将兵、カンパン壕よりも比較的軽度の負傷兵が身を隠し、脱出の機会をうかがっていました。しかし銃撃などによる攻撃を受け、食糧は全て持ち出されました。



缶詰壕入口のようす



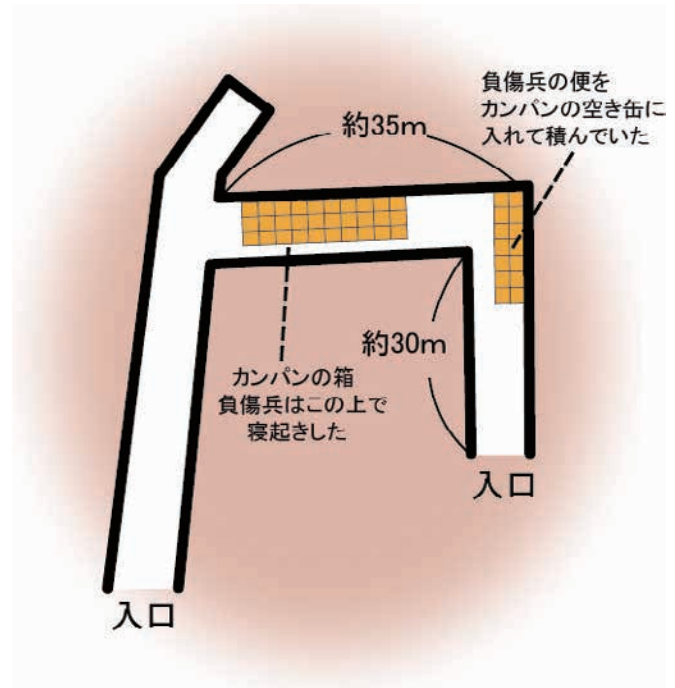
缶詰壕内部の見取り

カンパン壕

缶詰壕から100メートルほど西に位置し、内部はコの字の形状をしています。日本軍の食糧が保管され、カンパン（保存と携帯の為に固く焼きしめたビスケット）の入った箱が天井に届くほど高く積み上げられていました。

戦闘中には重傷の負傷兵が收容されましたが薬品類は非常に乏しく、5月上旬には米軍が前田高地を占領したために水の確保が困難となり、手当てもままならない状況でした。負傷兵の中には、カンパンの箱の上で寝起きする者もいたそうです。

5月6日、前田高地は米軍に制圧され日本軍が撤退していきますが、本隊に合流できなかった部隊や負傷兵はカンパン壕や缶詰壕、付近の壕に残っており、掃討戦を行う米軍から身を隠しました。



カンパン壕内部の見取り図



カンパン壕入口

当陣地壕群は前田高地の南側に位置し、首里の北方にあたる浦添市前田・経塚一带に広がっています。いくつもの細粒砂岩（ニービ）の小丘陵と谷地が入り組んだ地形で、当時谷は耕作地であり小丘陵には横穴を掘ってつくった近世以来の無数の墓が存在していました（前田・経塚近世墓群）。日本軍はこの小丘陵に鉱物を採掘する坑道の要領でつくられた坑道式（洞窟状）の壕をつくったほか墓を転用して壕として使用しました。

1944（昭和19）年8月に第62師団通信隊が前田集落に駐屯を開始、前田南側付近に人員用洞窟の構築に着手しますが、替わって12月に輸送・補給部隊である第62師団輜重隊が同地帯の陣地構築命令を受けて移駐します。翌年2月中旬までには地下洞窟状の自動車庫、燃料庫、修理工場、人馬棲息所、弾薬庫、医務室などが完成しますが、このように構築部隊やその用途から一帯は広範囲にわたる輸送・補給基地でした。2月中旬以降は地上戦闘用の陣地の構築を開始しますが、3月下旬からの米軍の艦砲射撃・爆撃により被害を受けた付近の道路・陣地の修復や、第一線への補給輸送が激増したことなどから戦闘陣地の構築は思うように進まなかったようです。そのため一帯で地上戦が行われた時点では戦闘のための諸施設はほとんど使用できない状態で、急造野戦陣地を構築して戦わざるを得なかったといわれています。

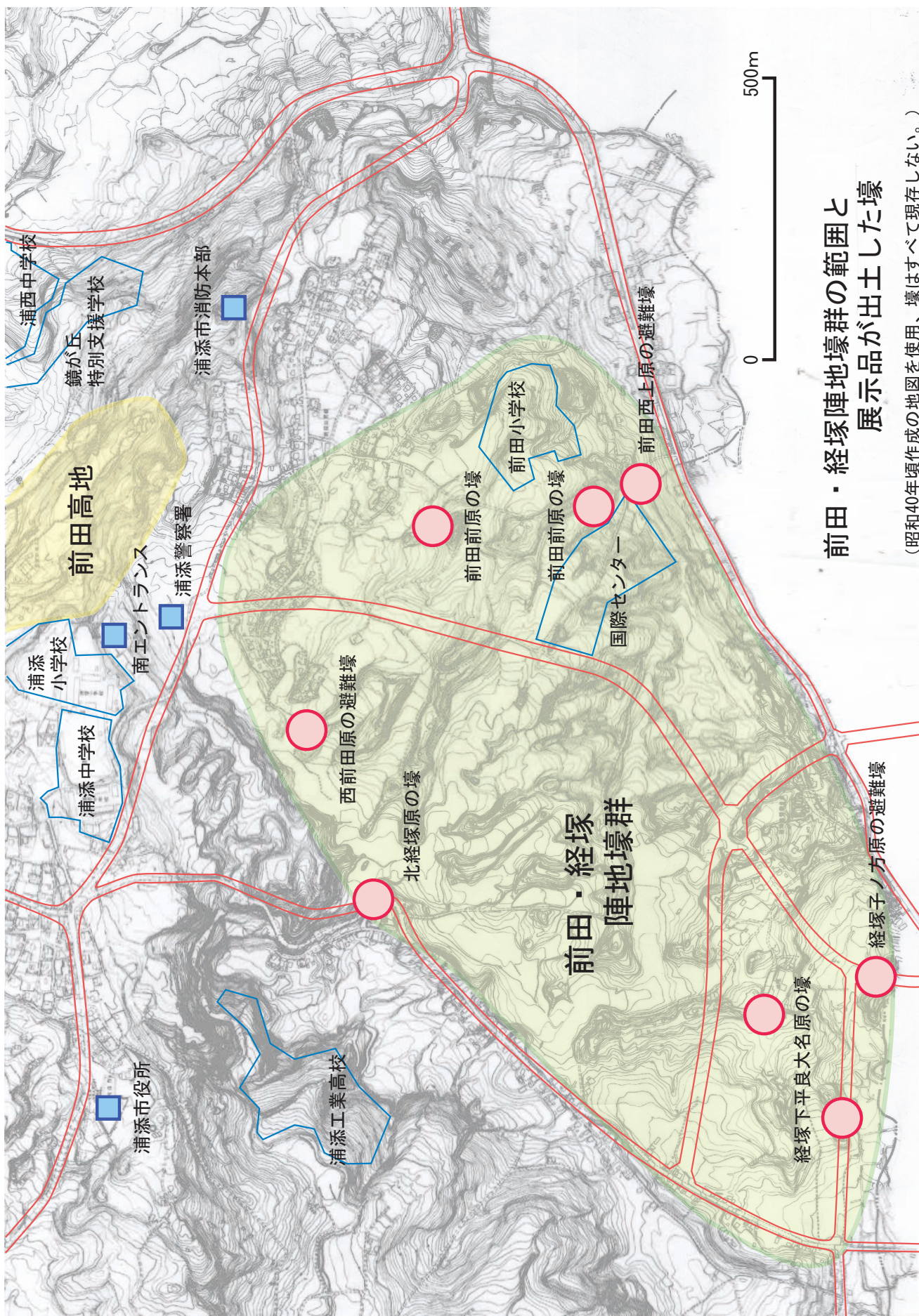
米軍が沖縄本島に上陸して以降、輜重隊は第一線への弾薬・糧秣の補給、負傷者の収容後送に忙しくなり、当陣地への出入りは頻繁であったと思われます。4月25日から前田高地の争奪戦が始まりますが、この頃から当陣地群一帯にも米軍が進出し始めます。日本軍は歩兵第32連隊を中心とした部隊を配備し「寸土を争う激戦」と表現される一進一退の戦闘を繰り返しました。

しかし5月中旬、米軍は当陣地帯を包囲するに至り、日本軍各部隊はこの包囲をくぐり抜け首里方面へ脱出、5月14日には全部隊が脱出し当陣地は米軍に制圧されています。

一方、前田集落などに近いため当地帯には住民の避難壕が点在していたほか、墓が即席の壕となっています。



坑道式の壕



前田・経塚陣地壕群の範囲と 展示品が出土した壕

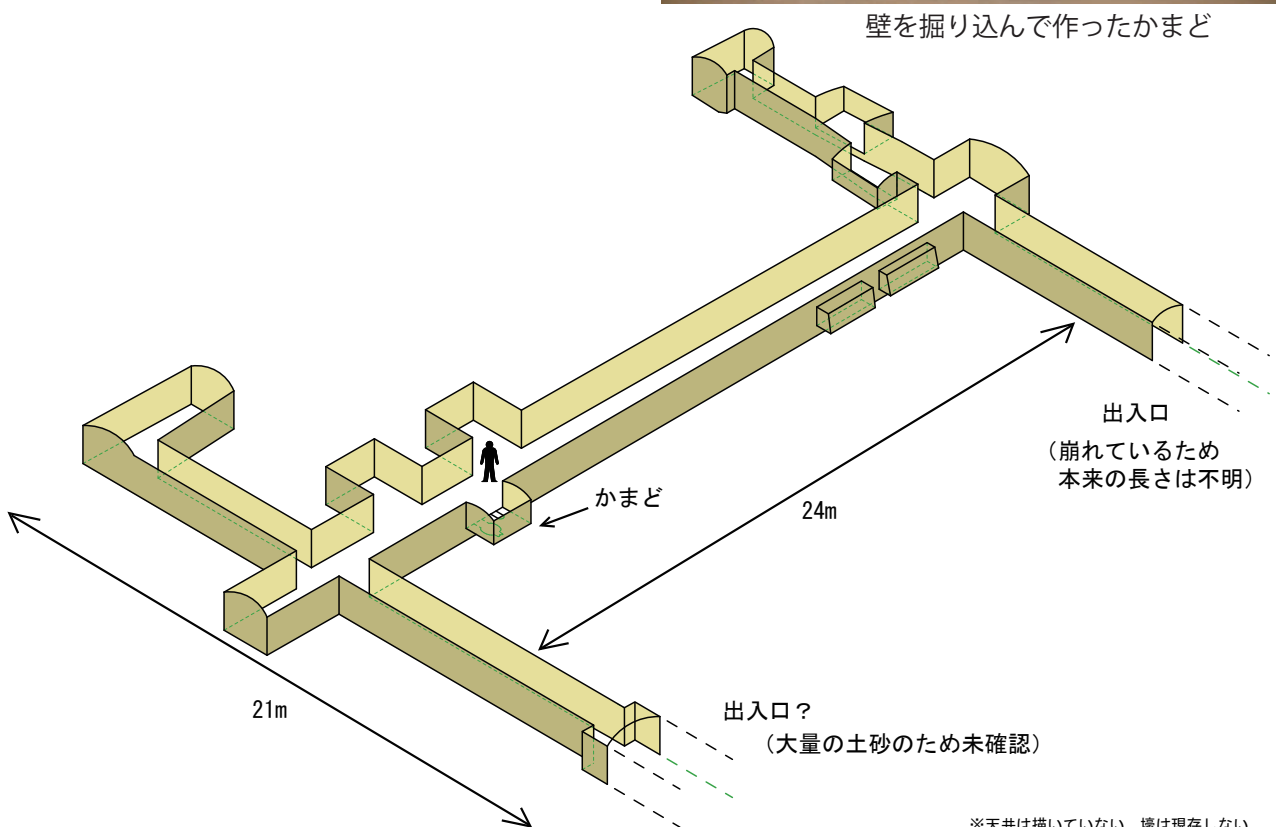
(昭和40年頃作成の地図を使用、壕はすべて現存しない。)

きたきょうづかばる とう
北経塚原の壕

北経塚原の壕は、第62師団輜重隊の陣地配備要図にそれと思われる壕が描かれていることから同隊が使用していたようです。詳しい様子は不明ですが、負傷者が収容され「患者壕^{かんじゃごう}」と通称された壕ではないかと推定されます。

細粒砂岩（ニービ）の丘陵斜面を掘削してつくられた坑道式の壕です。平面形はH形に近く、出入口は二か所あったようですが、大量の土砂に埋もれていて確定できませんでした。天井までの高さは約2m、部屋がいくつかつくられているほか煮炊きをするかまどもありました。壁には多くの窪みがあり、そのうちのいくつかには煤^{すす}が付着していたことから照明用としてローソクなどを使用していたようです。

前田・経塚陣地壕群



※天井は描いていない。壕は現存しない。

きょうづかしもたいら おおなばる ごう
経塚下平良大名原の壕

経塚下平良大名原の壕があった丘陵ではすき間のないほどにあった墓の多くも壕として利用していました。このエリアは第62師団輜重隊の陣地域からはずれていたためその構築や当初の利用の様子はわかりませんが、首里方面から前田地域へ日本軍が進出するルート上に位置するため多くの部隊が利用したと推測されます。

東西に細長い丘陵の南側にあった墓のほとんどが壕に転用されていましたが、墓は狭いよう移動のたびに外に出るのは危険なため、墓を拡張したりトンネルでつなげるなどしています。最大で10個の墓をつないでおり、横だけでなく階段で上下の墓もつないでいます。

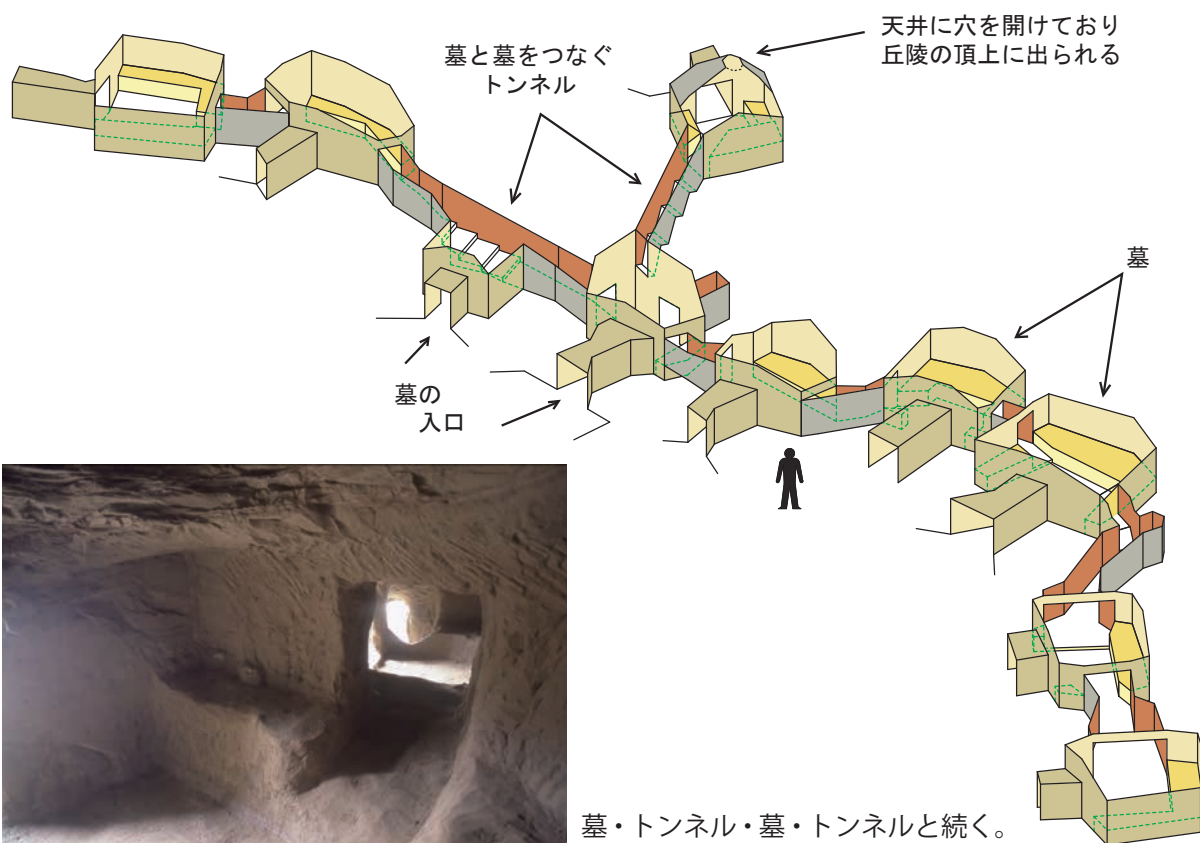


経塚下平良大名原の壕がある丘陵。横穴は墓だがその多くが壕として利用されていた。



壕に利用した墓。板を使い床を張っている。

前田・経塚陣地壕群



前田西前田原の避難壕

壕に改造した墓や最初から壕としてつくった横穴から多くの陶磁器が出土する事例がありますが、これらは地域の人々が使った避難壕です。避難壕で出土する遺物は大きく分けて二種類あり、一つは鍋・釜などの調理具や甕などの貯蔵容器など避難生活を送るために持ち込んだものです。もう一つは日常生活で使われていたとは考えにくい華やかな陶磁器類で、祝い事などのハレの日に使用するもので普段は大切にしまわれていた高価なものと思われる。戦争の被害から免れるため早くから避難したと考えられます。西前田原の避難壕出土の陶磁器の種類は多彩で、碗や皿、急須に湯呑、小杯、醤油差し、甕などで本土産のものが多く沖縄産のものは少ない様相となっています。



column

とうせいばんごう 統制番号

昭和 16 年から 21 年頃の戦時下に製造されたやきものには、「生産者別標示番号」(いわゆる統制番号) が記されたものがあります。これは、陶磁器の生産から販売が国の統制下で行われた時期に制定されたもので、生産地の記号と生産者の番号をあらわしています。

統制番号のあるやきものは、生産時期や生産地だけではなく生産者が特定できる日本の陶磁史上でもまれな資料として、学術的にも注目されています。沖縄の遺跡からも統制番号があるやきもの(「岐〇〇」[岐阜県陶磁器工業組合連合会]、「瀬〇〇」[瀬戸陶磁器工業組合]など)が出土しており、これらの「モノ」から当時の日本や沖縄経済の物流の一端を知ることができます。



「岐 286」の統制番号



碗の底面に記された
「瀬 424」の統制番号



防毒マスク（経塚下平良大名原の壕）



調理具・貯蔵具（前田西上原の避難壕など）



油缶（経塚下平良大名原の壕）



除毒包（経塚下平良大名原の壕）



米軍の懐中電灯（前田前原の壕）

column

大陸から来た部隊

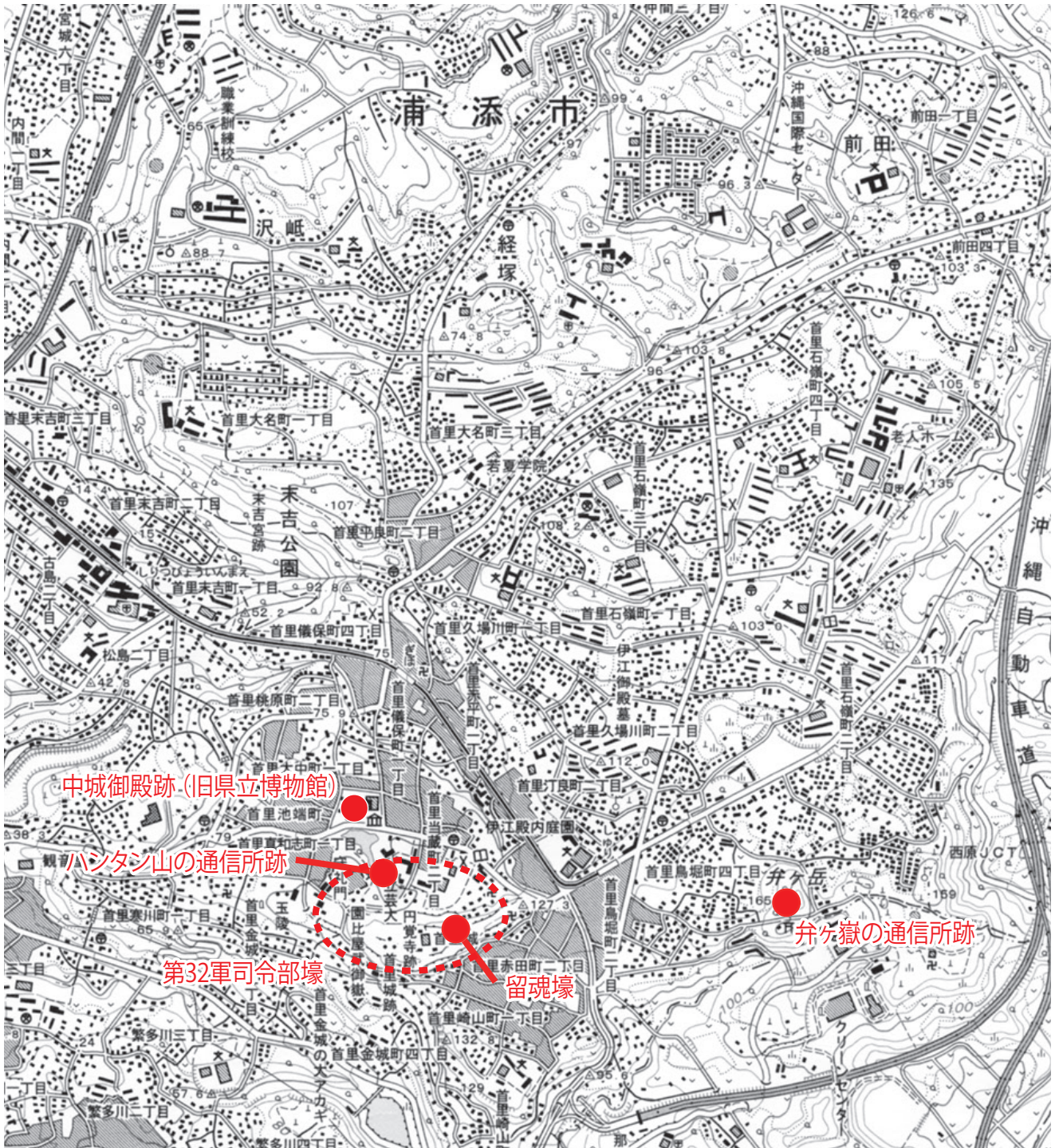
第32軍（沖縄守備隊）が創設され各地から集められた部隊の中に、中国大陸に駐屯していた部隊もありました。経塚下平良大名原の壕では中国大陸から来た部隊がいたことを物語る遺物が見つかっています。

防塵眼鏡は、風が吹くと砂埃がひどい中国北部で車両運転手や騎兵が使用していたものです。布地の本体は失われ鉄枠とガラスが残っていました。「クレオソート丸 / 関東陸軍倉庫」の文字が浮き出ている茶色のガラス瓶には下痢止めや赤痢予防のための丸薬を入れていました。「関東」とは中国北部にあった日本の租借地・関東州のことで、陸軍倉庫は旅順にありました。

「支那事変従軍記章」は日中戦争（当時は支那事変と呼んだ）に関与した軍人や文官などに与えられました。厳密には現地に行かなくても授与された場合もありましたが、大陸から来た将兵が持ってきたものかもしれません。



首里では、第32軍の首里司令部壕や陣地壕、通信所跡などの軍事的な施設に加え、住民が避難した壕や学徒隊壕、新聞社壕、また被災・破壊痕跡などの戦争遺跡が確認されています。さらに、異なる時代・性格の遺跡の発掘調査によっても戦争によって被災した痕跡の残る遺構や遺物が発見されています。今回は、これらの一部を紹介します。



今回取り上げる首里の戦争遺跡と戦争に関連する遺構・遺物のある遺跡

第 32 軍首里司令部壕

1944（昭和 19）年 10 月 10 日の 10・10 空襲を受け、12 月 3 日に首里に司令部を移すことになり、同月 8 日より構築を開始、周辺の生徒や市民も動員され、1945（昭和 20）年 3 月ごろには実際に機能していたようです。その後も戦況に応じて増築や壕内の部隊配置の変更などを経ながら、5 月 27 日の南部撤退まで使用されました。

壕内は「一大地下ホテル」といわれ、豪華な作りであったことが窺われます。現在では特に第 5 坑口で通路状の遺構や部屋状の遺構が残されています。

沖縄県教育庁文化財課と県立埋蔵文化財センターによる壕内部の現場確認調査を行いました。現在は崩落の危険性があることから、内部の公開はされていません。



第 2 坑道

坑口（左）は調査のために設置されたもの。内部は一部崩落していますが、約 90m は現存している。



第 5 坑道

5 つの坑道のうち、坑口が埋没せずに残っているのはこの第 5 坑道の坑口（左）のみである。内部も現存しているが、大部分は H 鋼と綱矢板で補強されている。



弁ヶ嶽の通信所跡

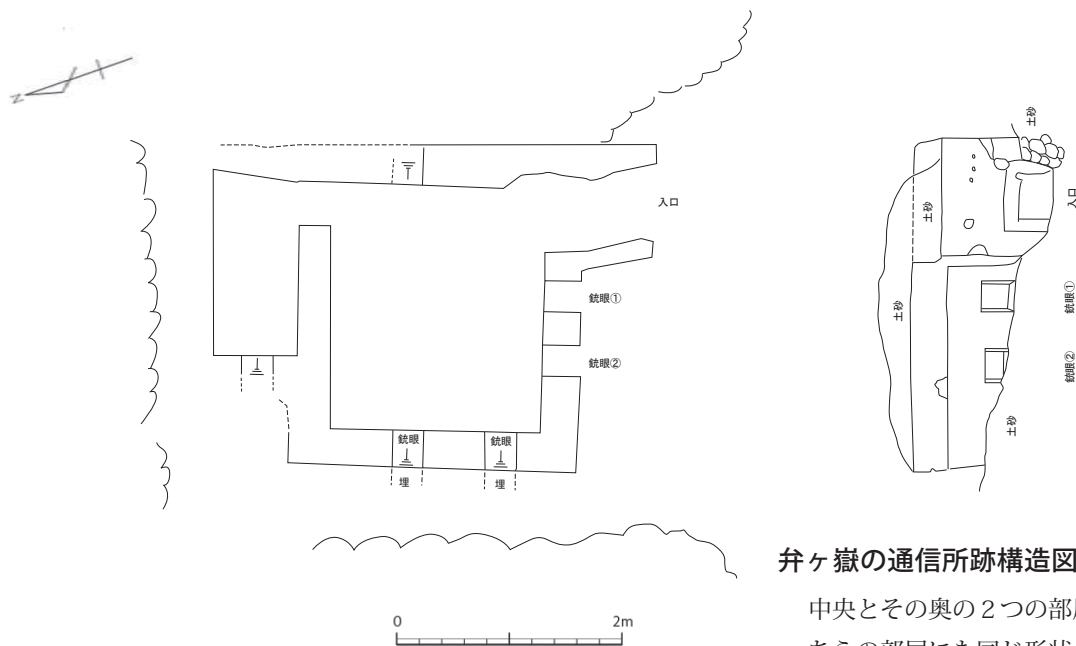
標高 165.7 m の最も首里周辺で高所である弁ヶ嶽に設置された、電気信号を送受信する施設です。

1944（昭和 19）年 10 月の時点で、第 32 軍の電波警戒隊が配備され、野戦電波警戒機が設置されていましたが、32 軍首里司令部壕の構築に伴って 12 月 1 日より通信所の構築が開始されました。その後、1945（昭和 20）年 5 月 30 日まで部隊が配置されていました。

内部は中央の部屋、さらに奥には小部屋があり、北を除く壁面には計 6 箇所（窓とみられるもの）があります。強固な施設であることからトーチカと考えられていましたが、これら窓の形状・規模は銃眼とは考えにくく、上記の歴史状況から通信施設と想定されます。



弁ヶ嶽の通信所跡（左：近景 右：内部天井の鉄筋） 鉄筋や厚いコンクリートなど、頑強な構造となっている。



弁ヶ嶽の通信所跡構造図

中央とその奥の 2 つの部屋があり、どちらの部屋にも同じ形状の窓がある。

ハンタン山の通信所跡

ハンタン山は龍潭^{りゅうたん}のふもとにある築山で、構造物は第32軍司令部壕の第1坑口周辺に残されています。

直接的に関連する史料はみつかりませんが、第32軍司令部に関連するものと考えられます。その経緯は不明ですが、合同無線通信所跡という木柱が建っています。

強固な施設なのでトーチカと考えられていましたが、構造が弁ヶ嶽の通信施設と類似することから、通信所と想定されます。



ハンタン山の通信所跡（左：近景 内部の様子）

column

松崎馬場跡から出土したサーベル

松崎馬場は、琉球王国の最高学府である国学^{こくがく}と龍潭を通る宿道の間にあつたとされます。この場所の発掘調査によって出土したのが本品です。このサーベルは明治19年製式の陸軍軍刀で、太平洋戦争まで使われていました。

このように沖縄では、戦争遺跡以外の発掘調査でも戦争に関わる遺物がよく出土します。



りゅうこんごう
留魂壕

首里城の物見台である東のアザナの城壁に掘削された学徒隊壕です。1944（昭和19）年の10・10空襲を受け、避難壕として沖縄師範学校の生徒と職員たちによって1945（昭和20）年初頭から掘削を開始し、3月中ごろには完成したとされます。3月31日からは同校の生徒・職員によって鉄血勤皇師範隊が結成され、その生活場所となったほか、3月下旬ごろからは東端の坑道を沖縄新報社が譲り受け、壕内で新聞の発行を行っていたようです。その後、鉄血勤皇師範隊は第32軍司令部の南部撤退に同行し、5月下旬には壕を離れたようです。

首里城跡で行われた発掘調査によって入口が発見され、司令部壕などに類似した構造であることが確認されました。調査によって、東側の壕内で新聞発行に用いられた活字、中央の壕内は御真影を安置した場所の可能性のある石敷遺構などが確認され、当時の証言を裏付ける発見が得られています。



留魂壕遠景

首里城正殿の裏側にある東のアザナの城壁に位置する。発掘調査によって、3つの壕と1つの洞穴が検出された。



留魂壕出土の電鍵

電気回路を開閉することでモールス信号を送る装置。留魂壕からは他に銃器、勲章とみられる金属製品なども出土している。



新聞社壕から出土した活字

壕内で新聞印刷に用いられた字型。「戦」や「戮」など、戦時を反映した文字がみられる。



壕 1 の内部状況



新聞社壕で出土した活字

この壕が証言に残る新聞社壕であったことを裏付ける出土遺物である。



洞穴 1 内の石敷跡

発掘によって近代の遺構であることが分かり、ここに御真影を安置した可能性がある。

留魂壕構造図

3つの壕と、中央に洞穴が確認された。平面は短冊状の構造で、通路中に2～3m四方の部屋が取り付いている。また、一部には杭木痕やツルハシ等の工具痕が残っている。

中城御殿跡（旧県立博物館跡）の

戦争関連遺構と遺物

中城御殿跡は次期琉球国王の邸宅で、この場所には現首里高校の場所から 1874 (明治 7) 年に移されました。1879 (明治 12) 年の廃藩置県によって尚泰王が首里城より移り住み、尚泰が東京に移住した後も尚公爵邸として尚家の人々が居住しました。

1944 (昭和 19) 年より御殿の一部が陸軍少佐の宿舎となり、1945 (昭和 20) 年 3 月下旬頃には宝物を金庫や敷地内の岩陰に隠すなどの措置をとったとされます。4 月 6 日に米軍の砲撃を浴びて炎上し、同月 10 日に陸軍が機関銃陣地としたことで尚家関係者は退去しました。

2007 (平成 19) 年度からの発掘調査によって、中城御殿としての尚家の暮らしぶりを示す様々な遺構・遺物のみならず、被災を示す遺構・遺物や隠された位牌など戦禍を物語る証拠が発掘されています。



被熱した石畳跡

石畳が炭で覆われているほか、○の部分には火災の熱によって金属製品が溶けて張り付いている。



埋甕の周囲に残る火災の層

埋甕の周りには火災による炭化木材が堆積して地層となっている。



弾痕の残る石牆

中城御殿跡の石牆には、戦禍による弾痕が残されている。



中城御殿跡出土の統制陶器

中城御殿跡では、様々な産地の統制番号のある陶磁器が出土している。



波 21



肥 71



ト 11



長工



岐 524



品 66



中城御殿跡出土の玉杯ぎよくはい

ろうせき 蠟石製で本来は半透明だったが、激しい熱を受けたことで変質している。



札中央部の赤外線写真
「妙」・「来」の2字を確認



位牌出土状況

中城御殿跡出土の木製漆塗りの位牌

類例資料や赤外線写真などから、琉球王家の女性のものである可能性が挙げられる。発見時は、あんきよ暗渠の中に缶に入れられて隠すように置かれていた。この出土状況は、戦時中に宝物等を隠したという証言に一致する。

5 おわりに

今回紹介した前田高地、前田・経塚、首里では、第32軍の首里司令部壕のように戦争遺跡として知られる場所だけでなく、前田・経塚近世墓群や中城御殿跡のように、戦争遺跡以外の遺跡を目的とした発掘調査によっても、戦争に関連する遺構・遺物が出土しています。これらは、遺構の構造や使用、被災の実態を明らかにする上で重要な証拠となっています。

沖縄県では、これまでに32件の戦争遺跡の発掘調査が行われ、南風原町の第32軍津嘉山司令部壕群のように、発掘調査によって新たな知見が得られた事例もあります。また、同じく南風原町の沖縄陸軍病院南風原壕群は、国内で先駆けて町の史跡に指定され、発掘・測量調査の成果を踏まえて整備復元を行い、壕の一部の一般公開を行っています。

遺跡を通じて沖縄戦の実像を明らかにして未来に継承していくためには、古い時代の遺跡や遺構・遺物と同様に地域の文化財として、一層の保存と活用を行っていくことが望まれます。

【参考文献】

- 浦添市教育委員会編 2015 『前田・経塚近世墓群 6 前田真知堂 A 丘陵 (1)・前田西上原 A 丘陵・前田西前田原 A 丘陵—浦添市南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書—』浦添市文化財調査報告書
- 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編 2017 『沖縄県史各論編第6巻 沖縄戦』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2011 『中城御殿跡—県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書 (2)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2012 『中城御殿跡—県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書 (3)—』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015 『沖縄県の戦争遺跡—平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第75集
- 沖縄山三四七五部隊戦友会・満州八〇三部隊戦友会 1986 『沖縄戦記 われらどさんこ兵士かく戦えり』
- 外間守善 2006 『私の沖縄戦記 前田高地・六十年目の証言』角川学芸出版
- 吉浜 忍 2017 『沖縄の戦争遺跡 〈記憶〉を未来につなげる』吉川弘文館

那覇市・浦添市の戦争遺跡分布図

那覇市①

各番	戦争遺跡名	種別	形態
1	首里司令部壕(第32軍司令部壕と周辺遺跡)	司令部壕	人工壕+構築物
2	首里城の岩蔵碑	戦争に関連する顕彰・記念碑	建造物
3	安谷川副官のガマ	住民避難地	自然洞穴
4	首里末吉の山陣地と周辺遺跡	住民避難地+陣地	自然洞穴+人工壕
5	宝川樋川沿岸の壕	陣地	人工壕
6	首里新原町2丁目の壕(表の方の壕)	住民避難地+陣地	自然洞穴+人工壕
7	首里新原町2丁目の壕(表の方の壕)	住民避難地	自然洞穴
8	中城御殿石蔵の弾痕とガマ	被災・破壊痕跡 他	建造物+自然洞穴
9	池端町民の防空壕群	住民避難地	人工壕
10	首里北川治いの壕	住民避難地	人工壕
11	皮瀬山公園の陣地跡	陣地	人工壕
12	青が淵の通信所(トーチカ跡)	陣地	構築物
13	首里崎山南1丁目弾痕の残る壁	被災・破壊痕跡	建造物
14	雨乞御蔵西側の壕群	住民避難地	自然洞穴+人工壕
15	ハンダグー吉葛津壕群	住民避難地	自然洞穴
16	ヒジガーピラ東側の陣地跡	陣地	人工壕
17	崎山御蔵南側の壕群	不明	人工壕
18	仲村梁山の壕	住民避難地	自然洞穴
19	金城町大アガ北側の壕	住民避難地	人工壕
20	主陸南側の壕群	不明	自然洞穴+人工壕
21	首里観音堂南下の陣地跡	陣地	不明
22	真嘉比壕	陣地	人工壕
23	繁多川公園内の壕群	不明	自然洞穴+人工壕
24	シガイヌカーの壕群	不明	自然洞穴+人工壕
25	真和志村夜場壕(新壕)	官公庁壕	自然洞穴+人工壕
26	龍名宮ヌガマ(お宮のガマ)	住民避難地	自然洞穴
27	インダのガマ	住民避難地	自然洞穴
28	ムアグヌガマ	住民避難地	自然洞穴
29	シツボのヌガマ(県庁壕)	住民避難地+官公庁壕	自然洞穴+人工壕
30	崖下原の壕群	陣地	人工壕
31	龍名公園舞台下の壕	陣地	人工壕

那覇市②

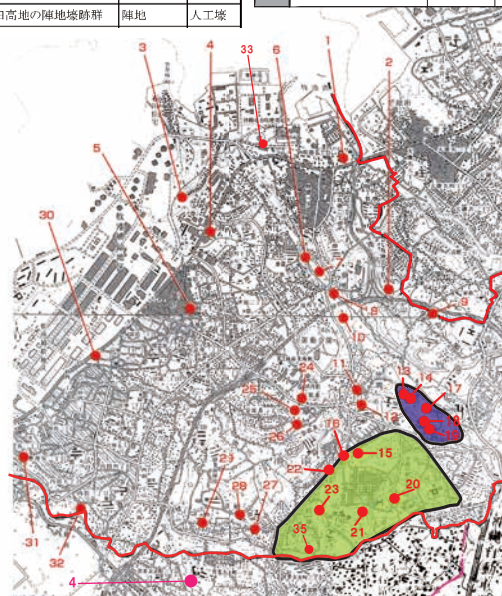
各番	戦争遺跡名	種別	形態
32	高袋の壕	不明	人工壕
33	アガリハシタ壕群	陣地	人工壕
34	龍名4丁目の壕(龍名のガマ)	住民避難地+陣地	自然洞穴
35	石部隊野戦病院分院の壕(ウツガマ)	住民避難地+陣地	自然洞穴
36	楚辺11丁目の陣地壕跡(原岳の壕)	陣地	人工壕
37	楚辺ソチチ山の壕	陣地	人工壕
38	新垣家の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
39	てんぶら坂の壕	住民避難地	人工壕
40	希望丘公園陣地跡	住民避難地	自然洞穴
41	首里家の砲の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
42	緑丘公園陣地跡	陣地	人工壕
43	旭ヶ丘公園の陣地壕	陣地	人工壕
44	千人ガマ跡	住民避難地	自然洞穴
45	辻原嘉徳庵跡	住民避難地	人工壕
46	旭花台地の陣地跡	陣地	構築物+人工壕
47	山下町大通りの壕	住民避難地	自然洞穴
48	南原2丁目の壕	陣地	人工壕
49	こぶさき山の陣地壕跡	陣地	人工壕
50	赤瀬配水池の壕群	陣地	人工壕
51	小祿の共同防空壕群	住民避難地	人工壕
52	宇栄原2丁目の壕	陣地	人工壕
53	宇栄原3丁目の壕	陣地	自然洞穴+人工壕
54	崎原灯台跡の壕	住民避難地	人工壕
55	「むくだ山」の海軍陣地壕①	陣地	人工壕
56	「むくだ山」の海軍陣地壕②	陣地	人工壕
57	観水(むくだ山)総合跡	陣地	構築物
58	掩体壕	飛行場	構築物
59	龍水司令部跡(砲臺指揮所壕)	司令部壕	構築物
60	日本隊の壕	陣地	人工壕
61	高射砲部隊の壕	陣地	人工壕
62	当間海軍砲台跡	陣地	構築物
63	高良の掩体壕跡	飛行場	構築物
64	留理塚(師範学校)跡	宇栄原壕	人工壕
65	首里ハンタン山の通信所跡	陣地	人工壕
66	首里城石垣の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
67	玉塚の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
68	護国神社の被災痕跡群	被災・破壊痕跡	建造物
69	繁多川の墓地の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
70	城岳の墓地の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
71	宇宇栄原の壕	陣地	人工壕

浦添市①

各番	戦争遺跡名	種別	形態
1	牧港テラブのガマ	住民避難地	自然洞穴
2	チヂフチャーガマ	住民避難地	自然洞穴
3	ワマジガマ	住民避難地	自然洞穴
4	城間洞	住民避難地	自然洞穴
5	城間の壕	不明	人工壕
6	21大隊第3中隊の壕	陣地	人工壕
7	伊根公園の陣地壕	陣地	人工壕
8	伊祖のトーチカ壕跡	陣地	構築物
9	嘉敷の病院壕	病院壕	人工壕(一部自然洞穴)
10	浦添大公園内の陣地壕	陣地	人工壕(一部自然洞穴)
11	ナカマンディア	不明	人工壕(一部自然洞穴)
12	仲間の壕	不明	人工壕
13	仲間住民避難壕群(シーマノクワキ、6軒の壕)	住民避難地+陣地	人工壕(一部自然洞穴)
14	ディークガマ	住民避難地+陣地	人工壕(一部自然洞穴)
15	仲間の住民避難壕	住民避難地	人工壕(一部自然洞穴)
16	北経家原の壕	陣地	人工壕
17	前田高地の陣地壕跡群	陣地	人工壕

浦添市②

各番	戦争遺跡名	種別	形態
18	浦添城跡南側斜面壕群(乾パン壕)	陣地	人工壕
19	浦添城跡南側斜面壕群(糧食・兵員壕)	陣地	人工壕
20	前口の陣地壕	陣地	人工壕
21	真知堂壕	陣地	人工壕
22	経塚の陣地壕	陣地	人工壕
23	経塚の壕	陣地	人工壕
24	津マタ原の壕群	住民避難地	人工壕
25	安波茶壕跡	陣地	人工壕
26	独立機関銃第十四大隊本部供養塔近くの壕	陣地	人工壕
27	浦添御殿堂の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
28	沢崎の陣地壕	陣地	人工壕
29	クリビ山の壕	陣地	人工壕
30	宮城のテイシブヌガマ	陣地	人工壕(一部自然洞穴)
31	勢原器の壕	不明	人工壕
32	カンジャーガマ	不明	人工壕(一部自然洞穴)
33	牧港の墓地の弾痕	被災・破壊痕跡	建造物
34	浦添ようどれ時しん御門	被災・破壊痕跡	建造物
35	経塚下平良大名原の壕	陣地	人工壕



0 1:50,000 1000m



■ 前田高地 ■ 前田・経塚陣地壕群

浦添市 関連企画

NPO 法人うらおそい歴史ガイド友の会によるガイドツアー

■『前田高地の戦跡めぐり』 6/24 (日) 9:15-12:00 (予定)

■『戦跡・前田高地をあるく』 6/30-9/1 (毎週土曜 午前中)

※但し 7/28、8/25 は催行なし

両企画ともに有料・要申込

(詳しくは浦添グスク・ようどれ館にお問い合わせ) TEL:098-874-9345

埋蔵文化財センター 次回の催し

■発掘調査速報 2018

2018年 7/31 (火) ~ 9/2 (日)

平成 29 年度に発掘された沖縄県内各地の発掘調査の最新成果をいち早く公開します

■関連文化講座

8/4 (土)・8/12 (日) ※詳細は決まり次第、HP などでお知らせします

沖縄県立埋蔵文化財センター・浦添市教育委員会

平成 30 年度 沖縄県の戦争遺跡

前田高地から首里まで

発行日：平成 30 (2018) 年 6 月 5 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>